



Japan Society of
Youth and Adolescent Psychology

Newsletter

第 99 号 2026 年 7 月 25 日
発行：日本青年心理学会事務局

■目次

< 第 34 回大会準備委員長挨拶 >

平石 賢二：第 34 回大会開催のご挨拶 1

< 特集：推し・推し活と青年心理学 >

神野 雄：現代青年の背骨としての「推し」 3

松木 太郎：「推し活」と問題行動のあいだ 3

溝口 侑：“推す” ことから “学ぶ” ことへ——青年期の学びとライフデザイン——
..... 4

佐藤 奈月：「推し」を通して世界が変わるとき 5

吉野 伸哉：地域に根差した推し活の可能性 5

< リレー連載「日本青年心理学会（青年心理談話会，青年心理学研究会）の歴史」 >

小沢 一仁：日本青年心理学会第一回大会から引き継がれるもの 6

< 書評・私のおすすめ，この一冊 >

二宮 克美：佐柳 信男・田中 あゆみ・梅崎 高行・黒石 憲洋・寺澤 美彦（編）

ナカニシヤ出版（2026 年刊）

『新釈ヒューマン・モチベーション：先人たちの理論の大系』 8

< 広報 >

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ 8

事務局からのお知らせ 9

< 第 34 回大会準備委員長挨拶 >

第 34 回大会開催のご挨拶

平石 賢二
(名古屋大学)

この度，名古屋大学教育学部・大学院教育発達科学研究科（東山キャンパス）で日本青年心理学会第 34 回大会を開催させていただくことになりました。会期は 2026 年 11 月 28 日（土）と 29 日（日）ですが，大会前日 27 日（金）午後 4 時 30 分からは研究委員会企画「若葉マーク企画第 5 弾『研究・教育活動に活かす生成 AI の使い方』」も行われます。

既に第 1 号通信でお伝えしましたが，今大会のテーマは「未来に向かって」としました。第 1 号通信では「日本青年心理学会の未来に向かう持続可能な発展を祈る想い」と「未来に向かって生きる青年たちにエールを送りたい」という 2 つの想いが込められていると述べました。このような想いが強くなってきたのは，私の定年退職が近いことや加齢と共に青年，青年期という存在を随分遠く感じるようになってきたからではないかと思います。

このニューズレターの原稿を執筆するにあたって，名古屋大学における青年心理学研

究の礎を築かれた依田 新先生のことを紹介したいと考え、手元にある依田 新先生が書かれた本を調べてみたところ偶然ですが以下の文章に出会いました。依田 新先生は1951年に名古屋大学教育学部の初代学部長に就任された方です。この文章は、依田 新先生を編集代表として7名の青年心理学者が編集し、1973年に出版された現代青年心理学講座全7巻（金子書房）の「刊行のことば」の前半部分を引用したものです。

「青年は未来である。われわれの周囲に見るかれらの容姿・服装がいかに異様であり、その言動がいかに奇矯であろうとも、かれらには未来がある。おとなにとって異様と見え奇矯と感じられるものから、未来が創生されてゆく。伝統や慣習を遠慮なく破壊することによって新しい価値が創造される。その意味で青年は常にわれわれおとなにとって対立者となる。対立者であるということは対象であること、すなわち、われわれがそれに対して向かい合い、語り合い、それによってかれらとの統合を求めるべき課題であるということである。青年との対話を失うことは、われわれの未来を失うことである。
-以下省略-（依田，1973）」

私は「青年は未来である」、「青年との対話を失うことは、われわれの未来を失うことである」という言葉は50年以上を過ぎた現代においても色あせることのない深い意味があると感銘を受けました。第34回大会には是非、多くの学部生、大学院生、若手研究者の皆様に参加していただき、共に対話できることを切に願っています。

名古屋は位置的にも日本の中心に近く、交通の便も良いのが魅力です。大会準備委員会は、大会運営改革検討WGの先生方に助けていただきながら、準備を進めています。参加される皆様にとって意義のある大会になるよう精一杯努力する所存です。会員の皆様には、身近な非会員の方たちにもお声がけいただけますと幸いです。多くの皆様のご参加を心よりお待ちしております。どうぞ宜しくお願い致します。

＜特集＞推し・推し活と青年心理学

研究委員会委員長：中尾 達馬
（琉球大学）

「推し活」がユーキャン新語・流行語大賞のノミネート30語に選出されたのは2021年のことです。それ以降も「推し」「推し活」という言葉は社会に広く浸透し、近年では推し活休暇を導入する企業も登場するなど、その広がりは個人の趣味や余暇活動の領域を超えつつあります。こうした動きは、推し活が単なる娯楽ではなく、個人のアイデンティティ形成や情緒的つながり、さらには日々の生活を支える心理的資源として機能している可能性を示しているのかもしれない。

本特集では、2026年2月28日に開催された研究委員会企画ワークショップ「推し・推し活から読み解く現代の青年」を契機として、本企画に関わった研究委員、ならびにワークショップにご参加いただいた先生に、それぞれの専門的視点から「推し・推し活」という現象について自由に論じていただきました。本特集が、会員のみなさまにとって、現代青年を理解するための一助となれば幸いです。

現代青年の背骨としての「推し」

神野 雄
(西武文理大学)

本稿では、2026年2月28日の日本青年心理学会研究委員会企画ワークショップを通じた日々の雑感をまとめます。

私自身の博士論文での研究テーマは「恋愛関係における嫉妬」でした。自分自身が大学院生時代に職業的にも経済的にも不安定で、当時の恋愛関係で「いつか捨てられるかもしれない」不安を学問で昇華しようとするという、なんとも不純な動機が多分に混じったテーマ設定だったと思います。そこまで必死な思いを持っていた背景には、恋愛関係にある自分には自信が持てる、相手に捨てられてしまえば自分のちっぽけなプライドがズタズタになってしまう…そういった心理があったのでしょう。まさに「アイデンティティのための恋愛」(大野, 2010)です。

今日の「推し」も、誤解を恐れずに言えばこの「アイデンティティのための恋愛」に通ずる、場合によってはもっと心の根源的なインフラを兼ねているところがあるように思います。『推し、燃ゆ』(宇佐見, 2020)では推しのスキャンダル⇒引退騒動に伴い、主人公の“やめてくれ、あたしから背骨を、奪わないでくれ(p.112)”という象徴的な言葉があります。なぜ話したこともない赤の他人が当人の主観では精神的な「背骨」になり得て、それなしには立つことすらままならない、とまで感じられるのでしょうか。「推し」は単なる恋愛の代替ではなく、一部現代青年のそれこそ「依って立つ」礎ともなり得るのかもしれませんが。

今回のワークショップでは、まさにそうした「推し」と自己との関係をめぐる示唆がいくつもあり、聴きながら自分の研究を振り返る時間になりました。恋愛も家族もコストが上がった現代、「推し」が多くの人々の心を支えるのは自然な流れなのかもしれません。それを外から既存の枠に当てはめ、分類して終わりにするのではなく、その意味の内側に少しでも近づこうとすること—それが青年心理学の仕事なのかもしれないと、帰り道にぼんやり思いました。

引用文献

大野 久 (2010). 青年期の恋愛の発達 大野 久 (編著) シリーズ生涯発達心理学④ エピソードでつかむ青年心理学 (pp.77-110) ミネルヴァ書房
宇佐見 りん (2020). 推し、燃ゆ 河出書房新社

「推し活」と問題行動のあいだ

松木 太郎
(広島国際大学)

「推し」という言葉は、今回のワークショップのメインテーマとして取り上げられるほど、私たちの日常にすっかりなじむようになりました。誰かを応援することは、日々の楽しみになり、ときには自分を支えてくれる大切な居場所にもなりえます。青年期の心理を考える立場から見ても、「推し活」は単なる趣味というより、自分は何が好きか、どんな自分でありたいかといった自己形成と深く関わる営みなのだと思います。

一方で、推し活には少し気になる側面もあります。たとえば、推し本人や周囲に負担をかけたり、公式のルールやマナーから外れたりする、推し活のなかで問題となる行動です。もちろん、そうした気持ちを抱くことと、実際に行動に移すことは同

じではありません。しかし、その気持ちがどこから生まれるのかは、心理学的に考える価値があるように思います。

私のゼミ生は卒業研究で、撮影禁止の場面でも写真を撮ってみたい、出待ちをしてみたい、偶然見かけた推しの後をつけてみたいといった、ルールやマナーを越えてでも推しに近づきたい気持ちに注目しました（玉城・松木、2025）。そこで興味深かったのは、他者から肯定的に評価されたいという「賞賛獲得欲求」が強く、かつ、推しが広く知られることで自分だけの特別な存在ではなくなるように感じる「流行への反発」が強い人ほど、そうした気持ちも高まりやすい、という点です。推し活の場面では、自分こそが本当のファンだと示したい気持ちや、推しにとって自分だけが特別でありたいという思いが、こうした行き過ぎた欲求の背景にあるのかもしれません。

なかでも、「流行への反発」は興味深い視点です。自分の推しが有名になることは、本来なら喜ばしいことのはずです。けれども、人気が出ることで、にわかファンが増えた、昔から知っていた自分の場所が奪われたと感じることがあるかもしれません。好きなものが広まるほど、逆に自分だけの特別な関係が薄まるように感じる。この矛盾した感覚は、自分らしさや所属する場所を探していく青年期の心理にも通じるように思います。

推しを応援することは、誰かを好きになる力であり、自分の世界を豊かにする力でもあります。ただ、その好きが、他者より優位に立ちたい気持ちや、独占したい気持ちと結びつくと、応援はときに推し本人や周囲に負担をかける行動へと近づくのかもしれません。推し活の背後にある承認欲求や所属感、特別でありたい気持ちを丁寧に見ていくこと。そこに、青年心理学が推しを考える面白さがあるのではないのでしょうか。

引用文献

玉城 媛梨・松木 太郎 (2025). 「推し」への問題行動欲求が高まる時——ファン心理と賞賛獲得欲求からの検討—— 中国四国心理学会第 81 回大会発表論文集

“推す” ことから “学ぶ” ことへ ——青年期の学びとライフデザイン——

溝口 侑
(関西大学)

「推し」や「推し活」は現代社会の一つの流行であると同時に、青年心理学がまだ十分に扱えていないテーマであるように思います。多くの若者には、関心を向け、何らかの形で思いや時間を注ぐ「推し」がいると言われています。そのような「推し」に対する憧れやエネルギーを、自分自身の学びやキャリアデザインへとつなげることはできないだろうか。私は、これまでロールモデルとキャリア形成の関係について研究をしてきましたが、「推し」はロールモデルとは少し異なりながらも、青年が他者から学ぶための新しい入口になるのではないかと考えました。そのような思いから、初年次の選択 PBL (Project-Based Learning) 科目の一クラスとして、「推しとライフデザイン」というテーマでクラスを開講しています。

この授業では、「推し」を単なる憧れの対象で終えるのではなく、その生き方や活動から学ぶことをテーマとしています。授業の流れは、学生は自分の好きな「推し」を二次元、三次元限らず一人選んで、インタビュー記事やラジオ、YouTube などの資料を手がかりに、「推し」の価値観や行動規範を分析します。次に、それを自分に引きつけたときにどのような成長をしたいのかを考えて、小さな成長を経験するために、日常生活の中で実践する行動を決めます。授業の最後には、実際に二週間、試行錯誤した成果と、自分の成長について報告するという流れです。

情報が溢れかえる現代社会では、大好きな「推し」の活動や言葉であっても次々と消

費されてしまうかもしれません。しかし、一時的であっても一人の他者を深く知ろうとし、その経験や価値観を丁寧にたどることは、自分の経験世界を拡張するきっかけになると考えています。「推し」は、現代の青年にとって、他者から学び、自分自身を見つめ直すための一つの入り口として、可能性を秘めた存在なのではないでしょうか。

「推し」を通して世界が変わるとき

佐藤 奈月
(福山市立大学)

2020 年、コロナ禍。私は、社会人院生として仕事と研究の二足の草鞋をはきながら、先の見えない不安な日々を送っていた。当時の私の支えになっていたのは、紛れもなく「推し」の存在だった。

劇場版が公開されたばかりのとあるアニメ作品に熱中していた私は、毎週末に映画館に足繁く通い、同じ映画を何度も見て、同じところで何度も泣き、帰宅してからは SNS でファンたちの熱意あふれる考察を読み漁っていた。映画の中で生きるキャラクターたちの決断や挑戦は、もはやフィクションではなく、昔からの友達、あるいは自分自身を見ているような圧倒的なリアリティを伴うものだった。私は、「推し」のように生きたいと思った。そして、背中を押されるように、仕事を辞め、研究を選んだ。

プロジェクト・サイエンスの観点から「推し」について考察した久保(川合)(2022)は、「推し」に救われたという経験は、「推し」が自分に直接なにかしてくれたということではなく、「推し」によって自分をとりまく世界のとらえ方が変わったということであり、「推し」に投射されているものは熱心なファンひとりひとりの「自分が世界を意味づけて生きてゆく力」ではないかと論じた。私にとっても、毎週同じ映画を見続ける行為は単なる趣味という枠には収まらず、自分はこれからどう生きていきたいのかを考える時間に他ならなかった。後にファンコミュニティを通して知ったことだが、その映画を見て退職・転職を決断したのは私だけではなかったらしい。

推しにハマリ抜け出せなくなっていく様相を、「沼に落ちる」という。あの時あの沼に落ちていなければ、全く違う人生だったかもしれない、と思うような電撃的な出会いは、青年が自己形成し、他者とつながり、未来を展望していく過程と、どのように結びついているのだろうか。今日も深い沼の底で推しの「尊さ」を語る青年たちの声に、耳を澄ませてみたい。

引用文献

久保(川合) 南海子(2022)．「推し」の科学——プロジェクト・サイエンスとは何か—— 集英社新書

地域に根差した推し活の可能性

吉野 伸哉
(千葉県立保健医療大学)

「推し」や「推し活」という言葉は今や多くの人が普通に使う一般語となっています。2026 年 2 月におこなわれた日本青年心理学会の研究委員会企画ワークショップでは、メディア露出から見る推し活の変遷とその問題点や、推し活にいそむ人びとの心理的特徴を学ぶことができ、たいへん有意義な時間でした。

話を伺ってみて私が気になったのは、なぜその対象を推すのかという点です。ビジュアルが好きだから？人となりが好きだから？パフォーマンスが良いから？コンテンツ

が面白いから？関係性が好きだから？

1つの理由として「ローカル性」という要素が関係しているのではないかと私は考えています。みなさんも住んでいる地域を拠点とするスポーツチームを応援したり、出身が同じタレントに親近感を持ったりすることがあるのではないのでしょうか。一方、自分の出身地や居住地と関係なくても気に入ったり好きになったりすることもあります。

「ゆるキャラ（ご当地キャラ）」や「ローカルアイドル」は地元の人が推しているだけでなく全国に幅広くファンが存在します。また、既存の知名度を生かして地域を盛り上げる試みもおこなわれているようです。「ポケモンローカル Acts」では地方自治体と「推しポケモン」がタッグを組み、地域の魅力を発信しています。2026年5月時点で12の都道府県に推しポケモンがいて、さまざまなイベントやグッズなどが展開されています。

学術的なアプローチに目を向けると、近年広がりを見せている「クラフトビール」は地域社会の発展やネットワーキングに深くかかわっていることが示唆されています（埴淵，2025；大森，2021）。ブランドに地域名を使用したり、地域の生産・消費に貢献したりすることで、地域に根差した独自性を確立しています。私の好きな（推しの？）「伊良コーラ」も新宿区の高田馬場・下落合を拠点とするクラフトコーラで、以前の住まいの近くに店舗があったことをきっかけに飲むようになりました。友人にも紹介し、贈り物としても利用しています。これらの観点から考えると、地域特有のものを推すことはまちを活性化させ、人びとの交流を促すことにもつながる気がします。地域を軸にした推し活には注目すべき点がたくさんありそうです。

引用文献

埴淵 知哉 (2025)．クラフトビール醸造所の全国悉皆調査 季刊地理学, 77, 152-159.
<https://doi.org/10.5190/tga.77.4.152>

大森 寛文 (2021)．日本におけるクラフトビール醸造所の立地要因と成長課題 地域活性研究, 15, 1-10. <https://doi.org/10.57340/ckg.15.0.1>

<リレー連載「日本青年心理学会（青年心理談話会，青年心理学研究会）の歴史」 連載第9回>

日本青年心理学会第一回大会から引き継がれるもの

小沢 一仁
(東京工芸大学)

本稿では、青年心理学研究会から日本青年心理学会への立ち上げ、そして第一回大会の準備に関わった私自身の個人的な経験を中心に述べていきます。私事にわたる内容も含まれますが、ご容赦いただけますと幸いです。

今年3月に長年勤めてきた東京工芸大学を定年退職し、4月より再雇用となり、立場の変化はありますが、目指す研究の目標は未だ果たし得ないまま現在に至ります。遡ると、山梨に生まれ育ち、地元の山梨大学教育学部に入りました。当時の心理学教室には、西平 直喜先生、古屋 健治先生、山田 良一先生、山添 正先生、五味 義夫先生がおられました。また、西平先生の門下には、宮沢 秀次先生、返田 健先生、大野 久先生がおられました。このように、青年心理学研究会に深く関わりのある先生方から、心理学、そして、青年心理学のご指導を受けられたことは、偶然がもたらしてくれた私にとっての大きな幸運でした。

その後、横浜国立大学の大学院に進学した際にも、さらなる幸運に恵まれました。当時30代半ばでおられた高木 秀明先生が、初めて院生を受け持たれることになり、高木ゼミの「院生第1号」となりました。大学院初日のガイダンスに参加した時のことです。ゼミ選択のために先生方の紹介が行われたのですが、初めてお目にかかった高木先生の姿に、今の若い方々には伝わりにくいかもしれませんが、まさに「星一

徹に出会った星飛雄馬」のような思いを持ちました。その後、ガイダンスが終了して解散した直後、その足で高木先生の研究室を訪ねてご指導をお願いしました。ここから、私の心理学研究者としての歩みが始まりました。また、院生時代には、近隣の東京学芸大学で青年心理学会が開催された際、藤原 喜悦先生、齋藤 耕二先生、福富 護先生からも直接ご指導を仰ぐ機会に恵まれました。

当時、高木先生は青年心理学会から学会への立ち上げに向けて尽力されており、私もそのお手伝いをするようになりました。1992年当時の青年心理学会運営委員および第一回大会準備委員は、高木 秀明先生、落合 良行先生、伊藤 裕子先生、都筑 学先生、小沢 一仁、小沢 理恵子でした。記念すべき日本青年心理学会第一回大会は、1993年に中央大学駿河台記念館で開催されました。その際、準備委員の先生方は「議論の時間を何よりも大切にしよう」と話し合われ、研究発表に対して他の学会にはない長めの時間を設定されました。この方針は、日本青年心理学会の良き伝統として、現在も引き継がれています。当時の先生方の熱い議論は、思い返すと先生方の人間関係の基盤の上でなされてきたことだと思います。

その点で現在の本学会に目を移すと、また、会員それぞれの出身、世代、あるいは研究観の違いを乗り越えて研究者同士の関係を築いていくために、現在の研究委員会が企画されている「若葉マーク企画」、「フラッシュトーク企画」、「ポスター発表」などは、非常に意義深い取り組みだと思います。ある時、大会前日の「若葉マーク企画」に、少し場違いかもしれないと思いつつ参加したことがありました。会場に白井利明先生の姿を見つけてホッとしたのを覚えています。本当に素晴らしい企画だと実感いたしました。

一方で、私の世代でも、一時は心理学の研究を志しながらも、さまざまな事情から道半ばで諦めてしまった仲間の学生や大学院生を何人も知っています。研究とは、孤独の中で行う厳しくも難しい試みであることは、私自身いまなお痛感しています。さらに、若い世代の研究者のみなさんを取り巻く環境は、私のような旧世代の牧歌的な時代に比べ、はるかに過酷になっています。じっくりと自身の研究を培っていくことが難しくなっている現代だからこそ、どのように研究を継続し、発展させていくかに苦慮している会員の方々にとって、先述した研究委員会企画は大きな支えとなると思います。

最後になりますが、上述の通り、私は幸運にも青年心理学会および日本青年心理学会に関わる多くの先生方との出会いに恵まれ、心理学を学び、研究者の道を歩むことができました。その恩返しのつもりで、私が意識して行っていることは、自分の専門テーマや方法論とは全く異なるものであっても、興味深い研究発表に接した際には、「この研究のここがとても面白いと思います。ぜひ発展させていってください」と直接声をかけています。本稿をお読みの会員の中には、縁もゆかりもない小沢からそんな声をかけられ、「そんなことを言われても」と戸惑われた方もいらっしゃるかもしれません。どうか私なりの、学会への勝手な恩返しと思ってご容赦ください。また、「小沢にそんなことを言われてみたい」と思ってくださいの方がいれば、ぜひ大会でお声がけください。

最近はここに、(笑)と付けることがあるようで、時代の変化に戸惑うこともあります。日本青年心理学会がこれからも会員一人ひとりの研究を温かく育てていく場として、さらなる発展を遂げていくことを心より願っております。

<書評・私のおすすめ、この一冊>

『新釈ヒューマン・モチベーション：先人たちの理論の大系』 佐柳 信男・田中 あゆみ・梅崎 高行・黒石 憲洋・寺澤 美彦（編） ナカニシヤ出版（2026 年刊）

二宮 克美
（愛知学院大学名誉教授・日本青年心理学会名誉会員）

実に 16 年の年月を要して、編者たちがまさに粘り強く刊行への「モチベーション」をもって、出来上がった本である。人間の行動をつき動かしているモチベーション（動機づけ）について、18 の理論的視点から記述されている。手短に紹介しよう。

まず欲求の階層構造とモチベーションとして、マズローの視点を取り上げられている。そして達成動機研究のはじまりとしてマックレランドとアトキンソンの視点が論じられる。次に好奇心の理論としてバーラインの視点、コンピテンスとエフェクタンス・モチベーションのホワイトの視点、親和動機に関する実験的研究のシャクターの視点が紹介されている。学習性無力感からポジティブ心理学へというセリグマンの視点、高い遂行と満足を導く目標とその心理メカニズムについてのロックの視点の解説が続く。行動システムとしてのアタッチメントとその個人差の発達についてボウルビィとエインズワースの視点を取り上げられ、自己効力（セルフ・エフィカシー）についてバンデューラの視点、自己決定理論のデシとライアンの視点、原因帰属モデルのワイナーの視点、フロー理論のチクセントミハイの視点が紹介されている。向社会的行動のモデルとしてアイゼンバーグの視点、達成動機における 2 つの目標志向性のドヴェックとニコルスの視点、2 次コントロール理論のロスバウムらの視点、主観的コントロールのスキナーの視点が解説されている。社会的・学業的コンピテンスのウェンツェルの視点、達成目標と接近・回避のモチベーションのエリオットの視点が紹介されている。執筆者総勢 24 名がこの本にかかわっている。本の題目にある新釈とは、既存の事柄を新しい観点から解釈するという意味である。ここで取り上げられた理論は、心理学を学ぶものにとって、必ず目にする理論であるが、ここまで丁寧に論じられた書物はないと言ってよい。青年のこころを理解するうえで、必ず参考になると言えよう。

<広報>

広報・ニューズレター編集委員会からのお知らせ

日本青年心理学会では、会員の相互交流や情報交換の目的で、年 3 回ニューズレターを発行しております。会員は記事の投稿・寄稿および特集テーマや書評などの提案をすることができます。また、ご専門や経歴、最近の掲載状況などを考慮して、広報・ニューズレター編集委員会から記事の執筆をお願いすることがございます。投稿・寄稿をご希望の会員、および委員会から執筆をお願いする会員には、「執筆のお願い」「フォーマット」をお送りします。

<特集>

特定のテーマについて、複数の著者が執筆します。年次大会や委員会企画の特集があります。

<書評・私のおすすめ、この一冊> <書評・映像作品ほか評論>

会員が執筆した書籍や青年心理学に寄与する書籍についての評論です。学術書籍に限らず、文学作品、コミック、ホームページ、映像作品なども取り上げています。

自薦・他薦を問わず、投稿・情報提供をお待ちしております。

<広報>

学会事務局や委員会からのお知らせが掲載されます。また会員に周知したい情報を掲載することもできます。

<会員から>

会員からの情報や意見を投稿することができます。

<その他>

上記以外の記事です。

■執筆・投稿・寄稿についてのお願い

1. 掲載された記事の刊行に関する著作権は日本青年心理学会に属します。記事の執筆者としての著作権は、そのまま寄稿した執筆者に属します。
2. 原稿料については進呈しておりません。ご了承ください。
3. 原稿の内容については初出のもので他の学会誌・学会紙などに掲載予定がないものとしてください。再掲や転載などの内容の掲載を希望する場合はご相談ください。
4. 提出された原稿の校正はありません。編集の都合上、若干の修正を行うことへのご了解をお願いします。特に日本青年心理学会ホームページに掲載しますので、執筆者および学会にとって、誤解や不利益が予想される表現等は修正などのご提案をすることがございますのでご了承ください。
5. 執筆においては、文献や資料などの適切な引用を行ってくださいますようお願い申し上げます。同じく個人情報の保護には十分にご配慮ください。
6. その他のご質問やご要望はご連絡を差し上げた担当委員または広報・ニューズレター編集委員会までご遠慮なくお寄せください。

日本青年心理学会 広報・ニューズレター編集委員会
jsyap-nlec@googlegroups.com

事務局からのお知らせ

■第34回大会のお知らせ

[第34回大会開催案内（第1号通信）](#)を3月13日（金）に、また[第2号通信](#)と[第3号通信](#)をそれぞれ7月7日（火）と7月21日（火）に、メーリングリストで配信いたしました。開催校は名古屋大学（平石賢二大会準備委員長）です。

Webサイトからも随時、情報を発信していきますのでご確認のほど、よろしくお願いいたします。多数のご参加をお待ちしております。

- ・ 日時：2026年11月28日（土）・29日（日）
- ・ 会場：名古屋大学東山キャンパス

■学会口座への年度会費のお振込みについて

2026年5月29日付で、ご所属の大学経由で年度会費の学会口座へのお振込みを確認しております。会員ご本人のお名前が不明な状態となっていますので、お心当たりのある方で、事務局に未連絡の場合には、seinenshinri@gmail.com宛にご一報ください。

また、年度会費につきましては、後述する会員管理システムJPASS（ジェイパス）での支払いをお願いできますとありがたく存じます。

■会員管理システムJPASS（ジェイパス）について

会員管理システムは、2025年4月1日からJPASSに変わりました。JPASSは公益社団法人日本心理学会が運用してきた会員管理システムを他学会でも共同利用できるようにしたものです。

「JPASS マイページ」では、オンラインでの年度会費の支払い、会員情報の自己管理、支払い等に関するデータの確認ができます。

また、2026 年 1 月下旬から JPASS における「会員相互検索」の機能を導入しました。JPASS の「マイプロフィール」にて、「会員相互検索」での各項目の公開可否を選択できます。各項目の公開可否について、必ずご確認ください。

JPASS にログインできない場合には、学会事務局へお問い合わせください。

■学会メーリングリストをご活用ください

現在、ニューズレターや大会・研究会などの案内を、学会メーリングリストによって配信しています。会員であれば、青年心理学に関する研究会や講演会・シンポジウムなどの案内を、このメーリングリストを用いておこなうことができます。セキュリティの関係上、事務局からの発信のみとなりますが、どうぞご活用ください。

日本青年心理学会事務局
Japan Society of Youth and Adolescent Psychology
E-mail: seinenshinri@gmail.com
Website: <https://www.jsyap.org>
振替口座: 00940-6-273417
口座名称: 日本青年心理学会

お問合せはできるだけ E-mail でお願いいたします。